

論文内容要旨

構文文法に基づく中国語結果構文の分析

東北大学大学院国際文化研究科

国際文化研究専攻

崔盼盼

指導教員 中本武志 准教授

小野尚之 教授

1 研究背景と目的

本論文は、中国語における動補構造を用いる結果構文を研究対象としている。

結果構文は多くの言語に存在する構文であるが、その形式は言語によって異なる。中国語の結果構文は複合動詞の一種である動補構造（前項動詞＋結果補語 RP）を使い、S-[V-RP]-O という形をとることが多い。結果補語 RP が非対格自動詞あるいは形容詞であるのが一般的であるが、前項動詞 V には自他の制限はない。

中国語における結果構文のプロトタイプとして、以下の文が挙げられる。前項動詞が他動詞で、その目的語が結果補語の主語と一致し、動作主の働きかけによって受け手に状態変化を生じさせるという他動的なタイプである。

- (1) 小王 推-倒 了 大树。
xiǎo wáng tuī-dǎo le dàshù
王先生 押す-倒れる PERF 木
「王先生は木を押し倒した。」

中国語には、典型的な結果構文以外に、(2a) のような主語と目的語の統語的位置が逆になる<原因型>や、(2b) に示すような同じ動詞が繰り返され、真の目的語と特殊な目的語を両方とる（以下、動詞コピー構文と呼ぶ）というほかの言語には見られない特殊な結果構文の形式も存在する。Goldberg (1995) の構文文法の観点からみると、構文の意味というのは、動詞の具える具体的な意味と、ある一定の統語形式が持つ抽象的な意味との統合である。したがって、結果構文の異なる形式もプロトタイプから拡張される異なる構文であると考えられる。

- (2) a. 青草 吃-肥 了 羊儿。
qīngcǎo chī-féi le yáng-er
青草 食べる-肥える PERF 羊
「青草を食べた羊が肥えた。」 (沈 1999:215)
- b. 小王 洗 衣服 洗-湿 了 袖子。
xiǎo wáng xǐ yī fu xǐ-shī le xiù zǐ
王先生 洗う 服 洗う-濡れる PERF 袖
「王先生は服を洗って袖を濡らしてしまった。」

中国語の結果構文に対して、様々な立場から数多くの研究が行われているが、一部の特殊現象に絞って考察することが多く、連続的な視点から中国結果構文の豊富な形式をま

とめて分析する研究は少ない。かつ、各構文間の有機的な関連性を説明できているとは言いがたい。

本論文は構文文法の枠組で、中国語における動補構造を用いる結果構文のほぼすべての下位分類、および関連する2種類の動詞コピー構文を全面的かつ詳細に考察する。中国語結果構文を適切に分類したうえで、各種類における独特な意味特徴・構文表示および成立条件を順に解明し、構文ネットワークを構築するとともに、最も典型的なプロトタイプの結果構文から、結果構文の延長線上に捉えられる動詞コピー構文までの構文拡張関係を明らかにすることを目的とする。

2 本論文の構成

本論文の主な構成は以下のとおりである。

第1章では、英・日・中の結果構文に関する研究背景および問題提起、そして本研究の目的・意義を紹介する。

第2章では、本論文の主な理論枠組である構文文法理論の概略を紹介する。

第3章では、結果構文の本質が使役構文であるという基本的な立場から、結果構文の使役義の由来を分析する。また、先行研究を踏まえ、結果構文を構文形式と意味構造の角度から大まかに<目的語指向型><主語指向型><原因型>という3種類に分ける。

第4, 5, 6章では、3種類の結果構文ならびに各種類の下位構文を1章ごとに考察し、それぞれの意味特徴・成立原因および拡張関係を明らかにする。

第7章では、結果構文の延長線上にある「動詞コピー構文」と、結果構文に類似する形式を持つ「過分義動補構造文」およびそこから拡張される「過分義動詞コピー構文」について、それぞれの形成過程を分析する。

第8章では、結果構文をめぐる構文ネットワークを構築する。

以下、本論文の分析の要約と主な結果を紹介する。

3. <目的語指向型>結果構文

第4章では、結果構文のプロトタイプである典型的なく目的語指向型>と4種類の特殊なく目的語指向型>について考察する。

まずは結果構文が使役構文であることを改めて説明する。典型的な使役構文、例えば *He opened the door.* において、一つの使役動詞 *open* で原因と結果の両方が表せ、結果を起こす動作主の具体的な行為（例えば *push, shoot* など）は文中に明示されない。それに対して、結果構文、例えば *He wiped the table clean.* は、「動詞+結果述語」という形式で因果関係を表現し、動詞 *wipe* が原因、すなわち<基礎行為>を表し、結果述語 *clean* が生じられる結果を表すため、原因と結果のどちらも明示される使役構文として考えられる。

使役構文の一種としての結果構文の意味構造を考察する際のいくつかの基準を明確にしておきたい。プロトタイプの結果構文は(1)のような文を指し、典型的な因果関係を表すため、典型的使役関係の条件にもすべて合致し、「手段・目的関係」を持つ。その意味特徴は以下のように表示できる。

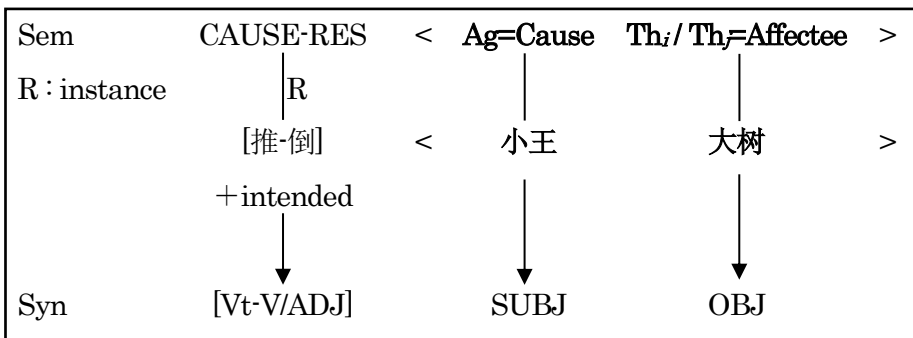
- (3) a. 原因事象と結果事象のどちらにも意図性がある。
- b. 前項動詞は他動詞である。
- c. 主語は意志性を持つ有生物である。
- d. 因果関係は直接的であり、時間間隔はない。
- e. 使役行為者 (Causer) は<基礎行為>の遂行者 (Actor) である。

前項動詞と結果述語の項構造の融合過程は、以下の通りである。意味階層の中でより際立つ前項動詞の外項Agentが、使役階層の中で卓越するCauseと融合して主語となる。前項動詞の内項Theme_iと結果補語の唯一の項Theme_jが同一指示のため1つが抑制され、残りのTheme項が卓越性の低いAffecteeと融合して目的語となる。

- (4) V推<Ag Th_i> + V倒<Th_j> → V_{caus}推・V_{res}倒<Ag[Cau] Th_i/Th_j[Aff]>
 (小王推大树) (大树倒了) (小王推倒了大树)

Goldberg (1995) が提案する構文ボックスを用いてプロトタイプの結果構文を(5)に表示する。原因事象と結果事象の両方に意図性があり、またその因果関係は手段・目的の関係でもあるため、構文に現れる動補構造に「+intended」という意味制約がある。

(5) 結果構文+ “推倒”



プロトタイプにかかる制限を一つずつ外していくと、様々な結果構文の形式が拡張される。まず、「主語は意志性を持つ有生物である」という制限を外すと、無生物主語タイプの<目的語指向型>へ拡張される。使役行為者は有生物から、擬人化(中右・西村

1998 : 140) によって、自らに変化を起こす力やエネルギーを持つ無生物へと拡張される。形式的にプロトタイプの結果構文と変わらないが、プロトタイプにみられる手段・目的関係は消失し、原因事象と結果事象の結合の緊密性は少し下がる。プロトタイプの結果構文と異なる意味特徴を (7) に示す。

- (6) 大風 吹-折 了 树枝。
 dà fēng chuī-shé le shù zhī
 大風 吹く-折れる PERF 木の枝
 「大風が木の枝を吹き折った。」

- (7) a. 原因事象と結果事象のどちらにも意図性はないが、結果述語の表す状態変化は前項動詞の変化方向に一致する。
 b. 主語は意志性を持たない自然現象や抽象的な概念などの無生物である。

項構造の融合と構文ボックスはプロトタイプの結果構文とはほぼ同じである。ただし使役行為の意図性は失われたため、構文ボックスに[+intended]という意味制約はなくなり、かつ、主語位置をとる Agent 項に対する有生性制限もない。

次に、主語が意図的に行った行為が主語の意図しない結果を引き起こす、つまり従来「強い結果構文」と呼ばれるタイプの結果構文を見る。意図とは無関係な結果が生じる結果構文 (8) は英語にもみられ、意図とは逆の結果が生じてしまう結果構文 (9) は英語では許されない。このタイプの独特な意味特徴を (10) に示す。

- (8) a. 花匠 浇-扁 了 郁金香。
 huā jiàng jiāo-biǎn le yù jīn xiāng
 庭師 水やりをする-ぺちゃんこ PERF チューリップ
 「庭師はチューリップに水をかけて、ぺちゃんこにした。」
 b. The gardener watered the tulips flat. (Carrier & Randall 1992)

- (9) a. 他 擦-脏 了 桌子。
 tā cā-zāng le zhuōzi
 彼 拭く-汚い PERF テーブル
 「彼はテーブルを拭いた結果、テーブルが汚くなった。」
 b. *He wiped the table dirty. (Washio 1997)

- (10) 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意される変化方向から外れている。

項構造の融合と構文表示もまたプロトタイプの結果構文とは大きくは変わらない。ただし構文ボックスの中で、両事象に意図性があることを表す「+intended」から、結果事象は予想されていないことを表示する「-expected」に変更する。

強い結果タイプは、結果が主語・動作主の意図とは異なり、かつ、前項動詞の表す行為を受ける対象と変化が起こる対象が一致しない“洗湿”タイプへ拡張される。例えば(11)では、服を洗った結果、洗濯物ではない袖が濡れてしまう状況を表している。

- (11) 小王 洗-湿 了 袖子。
xiǎo wáng xǐ-shī le xiù zi
王さん 洗う-濡れる PERF 袖
「王さんは洗濯して袖を濡らしてしまった。」

このタイプにおいて、原因事象と結果事象の間に時間差はないが、両者を結びつけるのは動作主の意図ではなく、偶然性によるところが大きい。そのため、原因事象と結果事象の間に何らかの一つの独立した内部事象 (internal event) が出現していると考えられる。動作主の一部である「袖」が前景化されてプロファイルされ、結果補語のフレームでプロファイルされる役割「濡れたもの」と融合して文の目的語となる。こうして、共有項のない原因事象と結果事象が結びれて結果構文という単文で表すことが可能となる。このタイプの独特の意味特徴を(13)に示す。

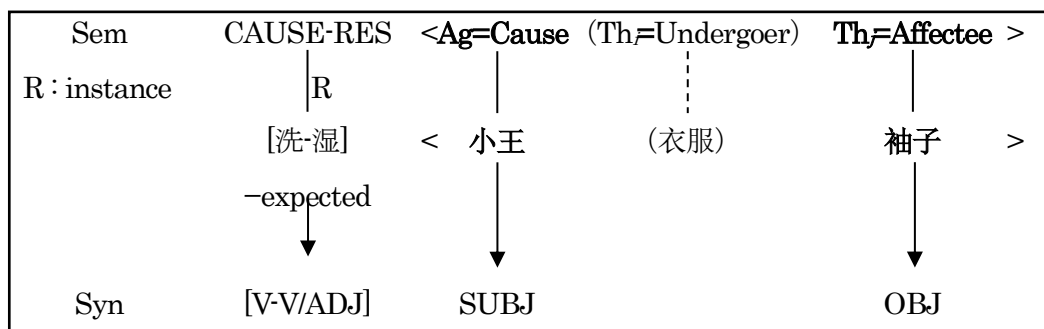
- (12) 原因事象 (内部事象) 結果事象
[小王洗 (衣服)] → [小王的袖子沾到水] → [袖子湿了]
王さんが (服を) 洗う 王さんの袖が水につかる 袖が濡れる

- (13) a. i. 原因事象は意図性を持つが、結果事象は意図性を持たない。
ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意されていない。
iii. 状態変化が起こる対象は、前項動詞の項ではないが意味フレームには含まれる。
b. 前項動詞は他動詞ないし非能格自動詞である。
c. 原因事象と結果事象の間に内部事象があり間接的だが、時間差はない。

また、このタイプはプロトタイプと項構造の融合の仕方が違い、“洗”の内項“衣服”(Th_i)が抑制されて現れず、“湿”の唯一の内項“袖子”(Th_i)が代わって Affectee と融合して目的語になる。融合過程を以下のように示す。

- (14) V洗<Ag Th_i> + V湿<Th_j>
 (小王洗衣服) (袖子湿了)
 → V_{caus}洗-V_{res}湿<Ag[Cau] Th_i[Und] Th_j[Aff]>
 (小王洗湿了袖子)

- (15) 動補構造+“洗湿”



さらに、原因事象にも結果事象にも意図性がない“哭走”タイプの<目的語指向型>結果構文へ拡張される。このタイプの前項動詞は人の心理現象または生理現象を表す非能格自動詞であり、行為の主体という項を一つとるだけで、状態変化をする内項をとらない。

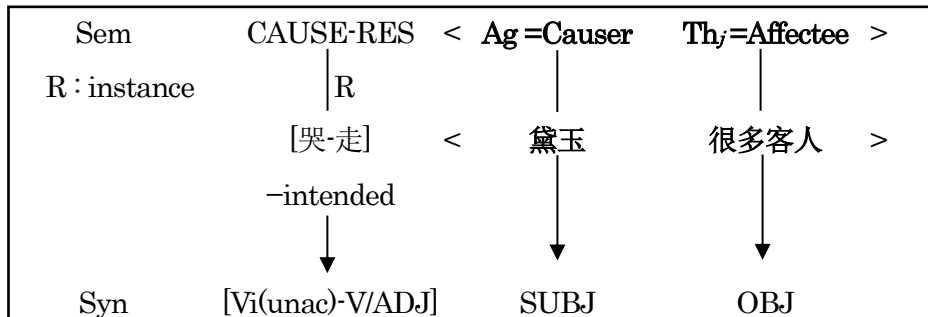
- (18) 黛玉 哭-走 了 很多 客人。 (Li 1990)
 dài yù kū-zǒu le hěn duō kè rén
 黛玉 泣く-帰る PERF たくさんの 客
 「黛玉が泣いたために、多くのお客さんが帰ってしまった。」

このタイプにも原因事象と結果事象の間に内部事象が想定され、語用論的に推論される状況を用いて両事象の関係を捉えるしかなく、臨時的な因果関係で結ばれるので、原因事象と結果事象の関係はかなり緩い。“洗湿”タイプの独特な意味関係を以下に示す。

- (19) a. i. 原因事象と結果事象のいずれも意図性を持たない。
 ii. 結果述語の表す状態変化は前項動詞に含意されない
 iii. 状態変化が起こる対象は前項動詞の項ではない。
 b. 前項動詞は主語にコントロールできない行為を表す非能格自動詞である。
 c. 主語は意志性を持たない。
 d. 原因事象と結果事象の間に内部事象があり間接的だが、時間差はない。

項構造融合過程と構文表示を以下のように示す。原因事象と結果事象のいずれにも意図性がないため、[-intended] で示す。

- (20) V 哭<Ag> + V 走<Th_j> → V_{caus} 哭-V_{res} 走<Ag [Cau] Th_j[Aff]>
 (黛玉) (很多客人走) (黛玉哭走了很多客人)
- (21) 結果構文+ “哭走”



プロトタイプの結果構文は意味上も形式上も最も厳しい制限がかかっているが、その制限を一つずつ外していくと、意味のないし形式的に新しい構文タイプに拡張され、結果構文という形式で表せる状況も自然に広がっていく。＜目的語指向型＞の段階では、使役行為者はすべて＜基礎行為＞の遂行者 (Actor) であり、因果事象の意図性および結合の緊密度の違いにより、構文拡張が発生する。また、意図とは逆の結果が生じてしまう強いタイプの結果構文以外に、＜目的語指向型＞タイプはすべて英語に対応する用法がある。

4. ＜主語指向型＞結果構文

第5章では、結果述語が表す状態変化が前項動詞の主語に指向する＜主語指向型＞について考察する。前項動詞の性質によって「非対格タイプ」と「非能格タイプ」に分けて、それぞれの意味・統語特徴と成立条件を考察する。

非対格タイプ＜主語指向型＞というのは、(22) のように前項動詞が主語を内項としてとる非対格自動詞であり、結果補語も変化した主語の結果状態について述べている。

- (22) 张三 病-倒 了。
 zhāng sān bìng-dǎo le
 張三 病気にかかる-倒れる PERF
 「張三は病気にかかって倒れた。」

非対格タイプ＜主語指向型＞の概念構造には、前項動詞が表す状態変化の暗黙の原因 (implicit cause) という参加者が想定され、非対格タイプの使役行為者 (Causer) となる。暗黙の使役主は動補構造が表す2つの状態変化両方の使役主となって項構造でも統語上でも実現すると、他動詞構文の性質を持つ＜原因型＞に拡張される。

非対格タイプ<主語指向型>とそこから拡張される<原因型>の概念構造をそれぞれ(23)に示す。この2つの構文はともに2つの使役関係 CAUSE を持つ、それぞれにおいてプロファイルされる使役関係 CAUSE を太字で示す。

(23) a. 张三病-倒了。(= (22c))

「張三は病気にかかって倒れた。」

$[[_{\text{EVENT1}}(\text{x CAUSE}_2) [y \text{ BECOME} [y \text{ BE 病}]]]$

CAUSE₁ $[_{\text{EVENT2}} y \text{ BECOME} [y \text{ BE 倒}]]]$

(x= implicit cause, y=张三)

b. 连续熬夜病-倒了张三。

「連続で徹夜することが張三を病気にして倒れさせた。」

$[_{\text{x CAUSE}_2} [[_{\text{EVENT1}} y \text{ BECOME} [y \text{ BE 病}]]]$

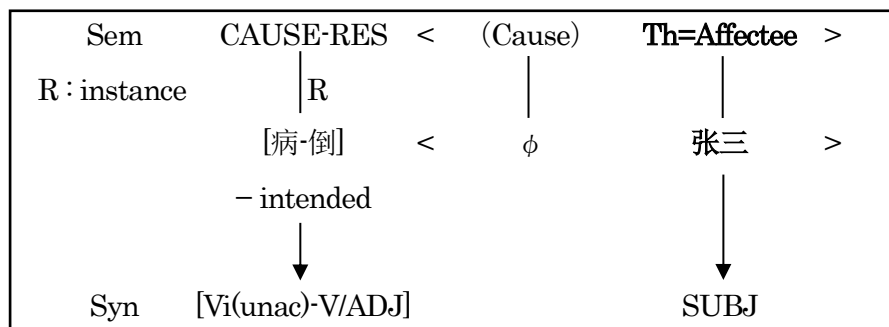
CAUSE₁ $[_{\text{EVENT2}} y \text{ BECOME} [y \text{ BE 倒}]]]$

(x=连续熬夜, y=张三)

非対格タイプの<主語指向型>における項構造の融合と構文表示は以下の通りである。暗黙原因項 Cause は卓越性の低い参与者として語彙的にプロファイルされず、暗黙のままである。結果構文のテンプレートと融合するとき、使役主 Cause は存在しないため、Affectee が唯一の名詞句として主語位置を占める。

(24) $V_{\text{病}} \langle Th_i \rangle + V_{\text{倒}} \langle Th_j \rangle \rightarrow V_{\text{caus 病}} \cdot V_{\text{res 倒}} \langle \phi[\text{Caus}] \quad Th_i = Th_j [\text{Aff}] \rangle$
 (张三病) (张三倒) (张三病倒了)

(25) 結果構文 + “病倒”



非能格タイプ<主語指向型>とは、以下のような文を指す。前項動詞は非能格自動詞または非能格自動詞として使われる他動詞であり、主語が何らかの活動や行為を行った結果、主語自身に状態変化が起こるという意味関係を表す。

(27) a. 张三 跑-累 了。
 zhāng sān pǎo-lèi le
 张三 走る-疲れている PERF
 「张三は走り疲れた。」

b. 他 吃-胖 了。
 tā chī-pàng le
 彼 食べる-太る PERF
 「彼は食べて太った。」

概念構造を (28) に示す。動作主の行為つまり<基礎行為>自体が使役行為者となり、状態変化を表す結果事象“累”との間に CAUSE という使役関係で結ばれる。CAUSE を2つ持つ非対格タイプとは違い、非能格タイプには暗黙の使役主 (implicit cause) が存在しないので、使役関係は動作主の行為と動作主に起こる状態変化の間にあるのみである。

(28) 张三跑-累了。(= (27a))
 「张三は走り疲れた。」
 [[_{EVENT1} x ACT(跑) (PATH)] CAUSE [_{EVENT2} y BECOME [y BE 累]]]
 (x=y=张三, PATH =马拉松)

なお、英語では非対格自動詞を用いる結果構文があるが、(29) のような非能格自動詞を用いる結果構文を許さず、必ず再帰代名詞を用いて他動詞文の形式で表現する。

(29) 前項動詞が非対格自動詞の場合
 a. The river froze solid. (Goldberg 1995 : 181)
 前項動詞が非能格自動詞の場合
 b. * I danced tired. (Hoekstra 1992)
 c. I danced myself tired.

非能格タイプは通常目的語を伴わないが、目的語を伴うこともある。その場合の結果補語は心理状態タイプ (“膩, 会”)・身体状態タイプ (“累, 饱”)・感情表出タイプ (“哭,

笑”) という 3 種類に限られ、目的語となる名詞句も「単独名詞」「複雑名詞句」「単純名詞句」の三種類に分けられる。それぞれの生起能力を考察した結果、心理状態タイプの結果補語と共起しうる目的語はかなり自由であり、感情表出タイプの補語と共起しうる目的語は最も厳しく制限され、身体状態タイプの補語はごく短い目的語か非常に複雑な目的語をとることが分かった。また、〈単独名詞-複雑名詞句-単純名詞句〉の順で容認度が下がること、さらに形容詞による修飾語句は容認度を上げるのに対して、指示詞は逆に容認度を下げる効果があることを明らかにした。

そこで、心理状態タイプ結果補語が伴う目的語を真性の目的語と呼び、それに対して短い目的語・長い目的語を虚目的語と呼び、それぞれの目的語を伴う非能格タイプの意味・構文構造および目的語の成立の理由について考察する。

真性の目的語の場合、結果補語は主語と目的語を両方とる 2 項動詞であるため、目的語は統語上要求され、自然に出現する。

- (30) 他 学-会 了 高尔夫。
 tā xué-huì le gāo ěr fū
 彼 学ぶ-通曉する PERF ゴルフ
 「彼はゴルフを学んで、できるようになった。」

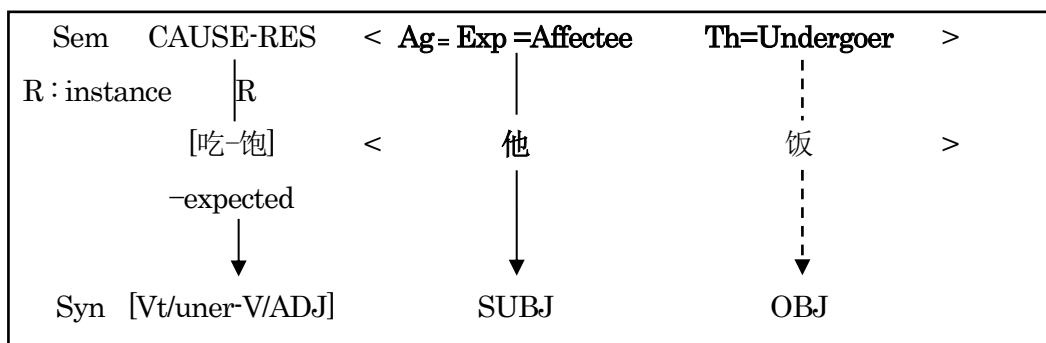
短い目的語の特徴は修飾語が一切付かない非指示的な単独名詞であるということである。身体状態タイプの結果補語と共起できるが、感情表出タイプの結果補語とは共起できない。動補構造に対して、結果述語が表す状態変化は必ず前項動詞に含意され、原因事象と結果事象の間に因果関係が直接的であり、時間間隔はない。

- (31) 他 吃-饱 了 饭。
 tā chī-bǎo le fàn
 彼 食べる-満腹である PERF ご飯
 「彼はご飯を食べて満腹になった。」

(31) の文における項構造の融合と構文表示を以下に示す。前項動詞の Theme 項“飯(ご飯)”は使役役割を指定されず、Undergoer として目的語の位置をとる。短目的語は一種の虚目的語であるため、構文の項役割との融合は義務的ではない上、統語上に出現しなくても文は成立するため、破線で結んで表示する。

- (32) V 吃<Ag Th> + V 饱<Exp> → V_{caus} 吃·V_{res} 饱<Ag=Exp[Aff] Th[Und]>
 (他吃饭) (他饱) (他吃饱了饭)

(33) 結果構文+ “吃饱”



一方、短い目的語と異なり、長い目的語は詳細であればあるほど容認度が高くなる。身体状態補語とのみ共起できる短い目的語に対して、長い目的語は身体状態補語のほかに感情表出タイプ補語とも共起できる。ただし、前者のほうが因果事象は比較的緊密に結ばれ、後者より容認度は高い。短い目的語の場合と同じく、長い目的語の場合の使役行為者（Causer）も行為対象を含む<基礎行為>自体である。項構造と構文表示は短い目的語と同じである。

- (34) a. 他 走-累 了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。
 tā zǒu-lèi le nà tiáo ní nìng bú kān de xiāng jiān shí zǐ lù
 彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道
 「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」
- b. ?妈妈 看-哭 了 那本 俄罗斯作家 写的 悲剧小说。
 mā mā kàn-kū le nà běn é luó sī zuò jiā xiě de bēi jù xiǎo shuō
 母 読む-泣く PERF あの-CL ロシア作家 書いた悲劇の小説
 「母はあのロシア作家が書いた悲劇の小説を読んで泣いた。」

2つの目的語に対する考察から分かるように、短い目的語が因果関係に対する制限は長い目的語より厳しいが、2種類の虚目的語の成立可能性は動補構造の因果関係の緊密度と相関関係がある。因果関係の緊密度が高ければ高いほど、虚目的語に対する容認度も相対的に上がる。

2種類の目的語はいずれも<基礎行為>の対象として使役行為者の一部であり、十分な使役力が必要とされる。最小限の情報量を持つ短い目的語に反して、情報量の増加に伴い、状態変化に対する使役力は<基礎行為>の行為部分から目的語部分に転移し、意味的かつ語用論的に成立するようになる。

実現する義務のない虚目的語があえて出現する理由は、焦点と話題という情報構造の視点から説明できる。焦点 (focus) は文の意味において比較的際立つ部分であり、話題 (topic) に係る新情報を反映する。中国語では、文法的に許される限り、焦点は一般的に文末に置かれる。

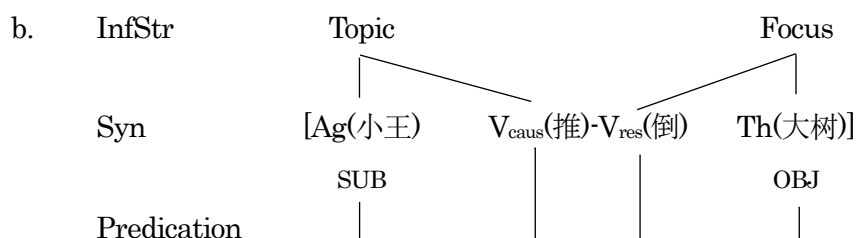
プロトタイプの結果構文において、外項と前項動詞が原因事象を担い、主題となる。結果述語と内項が結果事象を表し、焦点となる。語順も、原因 (Topic) — 結果 (Focus) と、類像的 (iconic) に並ぶ。

(35) a. 小王 推-倒 了 大树。

xiǎo wáng tuī-dǎo le dà shù

王先生 押し-倒れる PERF 大木

「王先生は大木を押し倒した。」



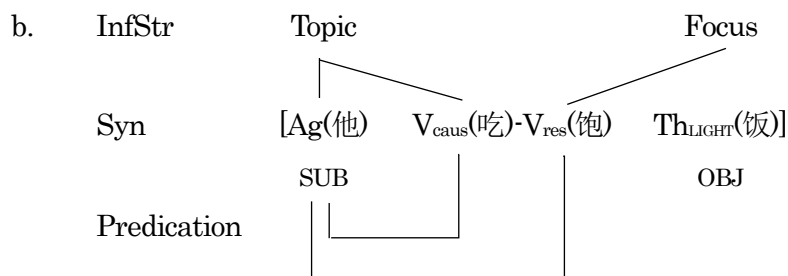
短い目的語の場合、文末の目的語 (“饭 (ご飯)”) は前項動詞のみの項であり、結果事象には参与せず、原因事象の自然な目的語であり、かつ最小限の意味情報しか持たない単独名詞であるため、目的語は背景化され、意味解釈上の重要性が非常に低い存在となり、文の焦点は結果補語 “饱 (満腹である)” だけとなる。

(36) a. 他 吃-饱 了 饭。

tā chī-bǎo le fàn

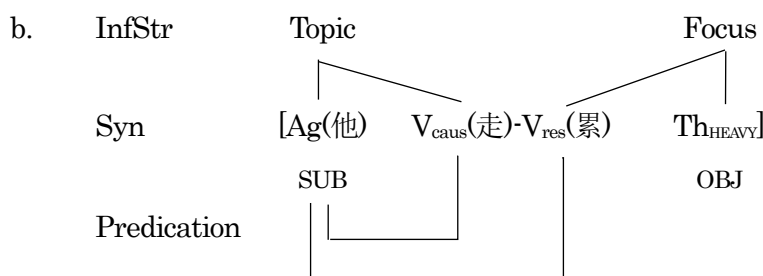
彼 食べる-満腹である PERF ご飯

「彼はご飯を食べて満腹になった。」



それに対して、長い目的語には正反対の操作が起こる。長い目的語も結果事象に参加しないが、大量の具体的な情報をもつため、背景化されず、焦点になってしまう。

- (37) a. 他 走-累了 那条 泥泞不堪的 乡间石子路。
 tā zǒu -lèi le nà tiáo ní nìng bú kān de xiāng jiān shí zǐ lù
 彼 歩く-疲れる PERF あの-CL 泥まみれの 田舎の砂利道
 「彼はあの泥まみれの田舎の砂利道を歩き疲れた。」



5. <原因型>結果構文

第6章では、主語に原因 (Cause) をとる<原因型>結果構文を意味特徴と拡張プロセスの違いに基づいて<単純原因型>と<倒置原因型>に2分類し、それぞれ非対格タイプと非能格タイプの<主語指向型>から拡張されると提案し、その意味特徴・統語上の特殊性の原因および拡張メカニズムについて考察する。

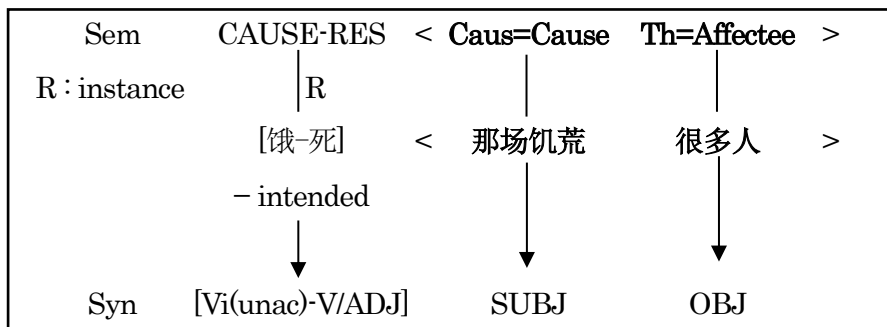
<単純原因型>の原因項は外から付加されるものではなく、最初から前項動詞の概念構造または意味フレームに存在して意味的に働いている原因 (Cause) を構文の力によって統語上に実現させたものである。語用論的に自然な使役力を持たなければならないが、自然である限りにおいてはその選択は自由である。しかし後項動詞も前項動詞の語用論的に自然な帰結でなければならないため、動補構造の組合せの選択はそれほど自由ではない。このタイプは英語にもみられる。

- (38) 那场饥荒 饿-死了 很多人。 (Li 1995)
 nà chǎng jī huāng è-sǐ le hěn duō rén
 あの-CL-飢饉 飢える-死ぬ PERF 多くの人
 「あの飢饉で多くの人が飢え死にした。」

項構造融合の過程と構文表示を以下に示す。前項動詞にある原因 (Cause) は項役割を持たないため「<因为那场饥荒> (あの飢饉が原因で)」で示す。非対格タイプ<主語指向型>が<原因型>へ拡張することによって暗黙項が使役主として実現し、使役の意味構造を持つ他動型の使役構文となる。

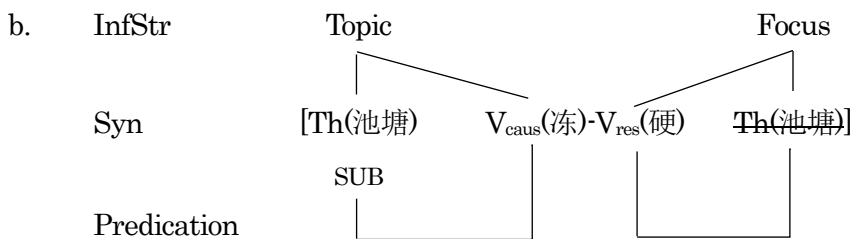
- (39) V 饿 <<Caus> Th_i> + V 死 <Th_j>
 (<因为那场饥荒>很多人饿) (很多人死)
 → V_{caus} 饿-V_{res} 死 <Caus [Caus] Th_i=Th_j [Aff]>
 (那场饥荒饿死了很多人)

- (40) 結果構文+“饿死”

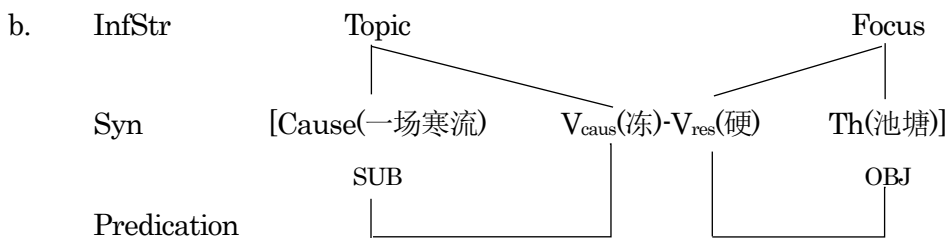


<単純原因型>の拡張過程を情報構造から説明する。元々存在する暗黙の原因項は、意味的かつ統語的な必要に応じて、原因事象の背景として主語位置に生起し、同時に変化対象である“池塘”は前景化されて文末に移動して焦点となる。このような還元的な拡張過程を経て、非対格タイプ<主語指向型>から<単純原因型>が拡張される。

- (41) a. 池塘 冻-硬 了。
 chí táng dòng-yìng le
 池 凍る-硬い PERF
 「池がカチカチに凍った。」



- (42) a. 一场寒流 冻-硬 了 池塘。
 yī chǎng hán liú dòng-yìng le chí táng
 一-CL-寒波 凍る—カチカチ PERF 池
 「寒波が池をカチカチに凍らせた。」



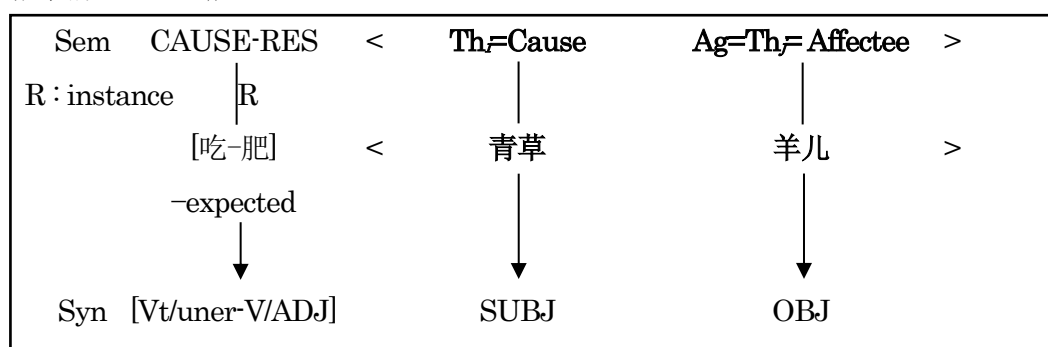
<倒置原因型>というのは(2a)のような文である。使役行為者は、<基礎行為>自体から二次的メトニミックな拡張を経て<基礎行為>の対象となる。前項動詞の意味上の主語すなわち動作主が文の目的語位置に生起し、意味上の目的語すなわち動作の対象が文頭に現れ、意味役割と統語位置が逆転しているように見える。前項動詞は他動詞ないし目的語と共起可能な非能格自動詞であり、結果述語は「飽きる」型の心理状態・身体状態または感情表出を表す動詞ないし形容詞である。因果事象の結合関係が緩く、意外な結果の場合において容認度が上がる。<倒置原因型>は独立性の高い2つの事象を強引に結び付けて一つの文で表現することも可能であり、結果構文の範囲をかなり広げている。

- (2) a. 青草 吃-肥 了 羊儿。
 qīngcǎo chī-féi le yáng-er
 青草 食べる-肥える PERF 羊
 「青草を食べた羊が肥えた。」

<倒置原因型>に用いられる原因項は、前項動詞の目的語であり、意志を持つ有生物であってはならない。単音節名詞は排除され、指示的な名詞句であり、具体的であればあるほどよい。結果状態が常識的に容易に推論できるか、または逆に常識からとは逆の驚くべき結果状態になるとき、原因として認められる。項構造の融合と構文表示を以下に示す。

- (43) V 吃<Ag Th_i> + V 肥<Th_j> → V_{caus} 吃-V_{res} 肥<Th_i[Cau] Ag=Th_j[Aff]>
 (羊儿吃青草) (羊儿肥) (青草吃肥了羊儿)

- (44) 結果構文+ “吃肥”

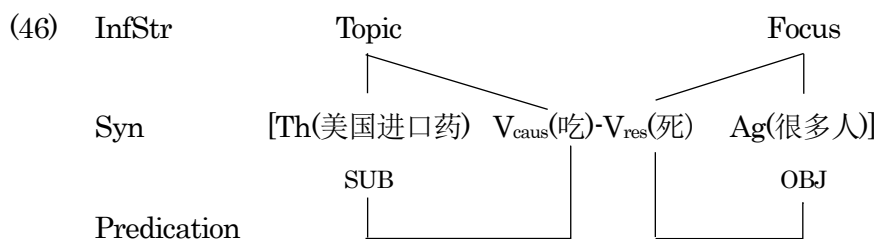


単音節名詞目的語は統語形式が極めて単純であり、前項動詞が取る最も自然な目的語として、結果を引き起こす動作に含意される意味要素である。特定の指示対象を持たず、主題としても、使役の原因項としても力不足であり、<倒置原因型>には拡張されない。

長い目的語を伴う非能格・他動詞タイプ<主語指向型>の場合、長い目的語は結果状態を引き起こすのに必要不可欠であり、かつ大量な情報を持つため、焦点となりうる。一方、長い目的語は指示対象が明確であり、主題としても十分機能しうるため、状態変化の主体が焦点化される場合、長い目的語が背景化されて文頭に現れ、<倒置原因型>となる。

さらに、結果述語が動詞から推測しにくく、意外な結果を表す場合、結果事象全体が焦点となり、被動者の脱焦点化がさらに発生しやすい。

- (45) b. 美国进口药 吃-死 了 很多人。
 měi guó jìn kǒu yào chī-sǐ le hěn duō rén
 アメリカから輸入した薬 食べる-死ぬ PERF たくさんの人
 「アメリカから輸入した薬を食べてたくさんの人が死んだ。」



6. 2種類の動詞コピー構文

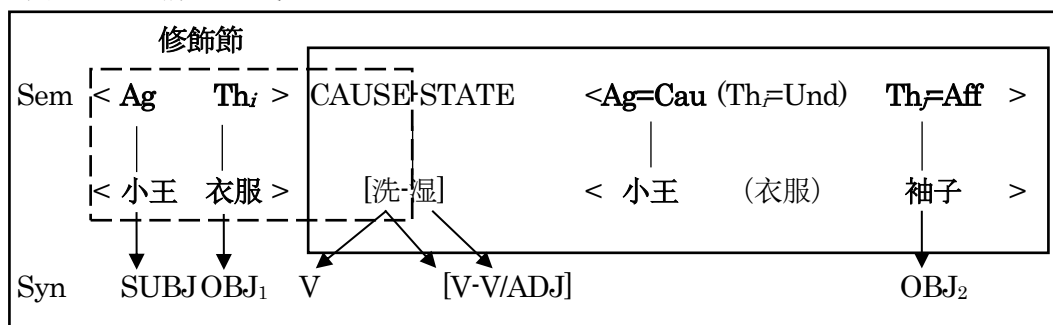
第7章では、結果を表す動詞コピー構文と過分義を表す動詞コピー構文を考察する。両者は構文形式が同じように見えるが、実際には結果構文と過分義を表す動補構造文から異なるメカニズムを経て拡張される異なる構文であることを提案する。

- (47) a. 小王 洗 衣服 洗-湿 了 袖子。
 xiǎo wáng xǐ yī fú xǐ-shī le xiù zi
 王先生 洗う 服 洗う-濡れる PERF 袖
 「王先生は服を洗って（着ている服の）袖を濡らした。」
- b. 他 挖 坑 挖-浅 了。
 tā wā kāng wā qiǎn le
 彼 掘る 穴 掘る-浅い PERF
 直訳「彼が穴を浅すぎる深さに掘った。」
 意訳「彼が穴を掘ったが、浅すぎだった。」

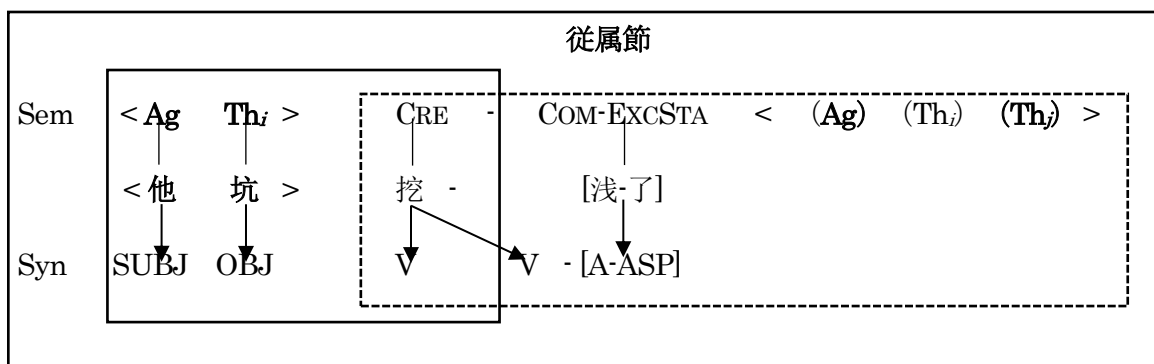
2種類の動詞コピー構文それぞれの構文表示を以下に示す。(47a)の結果を表す動詞コピー構文において、動補構造に破線のボックスで示す動詞コピーの修飾節が付け加えられ、

すべての項が実現している。(47b) の過分義を表す動詞コピー構文では、前項動詞で表す動的事象が前景化されて文の主要部分となり、統語上に中心的な地位を占め、過分義動補構造はそれに意味を補足する従属節となる。

(48) 動詞コピー構造 + “洗湿”



(49) “偏离义”動詞コピー構文 + “挖浅”



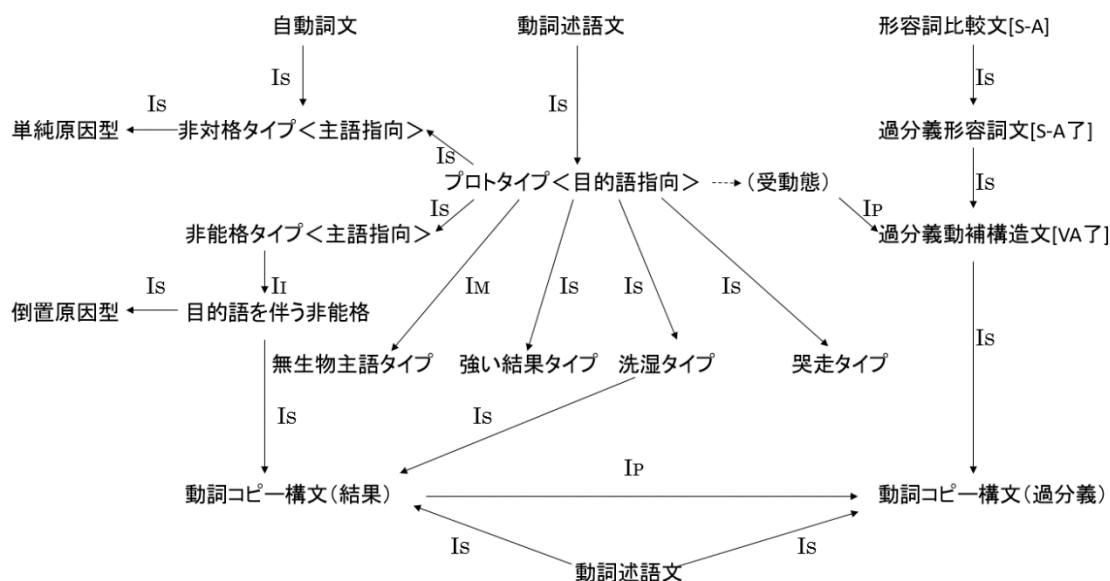
7. 結論

本論文は、3 種類の結果構文とそれぞれの下位分類、ならびに結果構文の延長線上に捉えられる動詞コピー構文を考察し、それぞれの意味・統語特徴および成立条件を明らかにした。意味の制限も統語上の制約も最も厳しいプロトタイプの結果構文から、因果事象の緊密性に関する制限条件を一つずつ除くと、特殊なく目的語指向型>が拡張される。さらに、使役行為者の拡張に伴い、2 種類の<主語指向型>および 2 種類の<原因型>結果構文へと順に拡張される。最後に、抑制される項を実現するために、修飾節を用いて構文形式を補うと、動詞コピー構文などが拡張される。

英語はほとんどの<目的語指向型>と非対格自動詞を用いる<主語指向型>およびそこから拡張される<単純原因型>を許容するが、拡張程度が最も高い<倒置原因型>と複雑な形式を持つ動詞コピー構文は英語において見当たらないため、中国語結果構文の拡張程度の高さが分かる。

最後に、本論文で考察したすべての構文タイプを、結果構文をめぐる構文ネットワークの中に位置づけ、Goldberg (1995) が提案する多義性のリンク (IP)・具体例のリンク (Ii)・メタファー的拡張のリンク (IM)・部分関係のリンク (Is) という 4 種類の継承リンクを用いて、これらの構文の間の拡張関係を表示する。

(50) 結果構文をめぐる構文ネットワーク



参考文献

Carrier, J., & Randall, J. H. (1992). The argument structure and syntactic structure of resultatives. *Linguistic inquiry*, 173-234.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Hoekstra, Teun (1992). Aspect and theta theory. *Thematic structure: Its role in grammar*, 145-174.

Huang, J. (2006). Resultatives and unaccusatives: a parametric view. *Bulletin of the Chinese Linguistic Society of Japan*, (253), 1-43.

Li, Yafei. (1990). On VV compounds in Chinese. *Natural language & linguistic theory*, 8(2), 177-207.

Li, Yafei. (1995). The thematic hierarchy and causativity. *Natural Language & Linguistic Theory*, 13(2), 255-282.

Washio, R. (1997). Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics*, 6(1), 1-49.

中右実・西村義樹（1998）『構文と事象構造』研究社出版.

沈家煊（1999）《不对称和标记论》江西教育出版社.

論文審査の結果の要旨

学位の種類	博士（国際文化）	氏名	サイ ハンハン
学位論文の 題名	構文文法に基づく中国語結果構文の分析		
論文審査担当者氏名 (主査)	中本 武志, 小野 尚之, 岡田 毅, 沈 力.		
論文審査の結果の要旨（1,000字内外）			
<p>近年、言語学では「ドアを押し開ける」のように、一文で原因となる動作と結果状態の両方を表す構文に対する関心が高まっている。因果関係を表す結果構文は多くの言語にあるが、その現れ方は言語によって異なるためである。本論文は、中国語の複合動詞形式を持つ結果構文を、英語や日本語と対照しつつ分析することによって、言語の普遍性と個別性が生じる要因を探ることを目指している。</p> <p>因果関係は二つの事象を使役という普遍的な概念で結びつけることで表されるものであるが、基本的な使役の諸特徴は各言語で共通しているとしても、その特徴を一つずつ緩めていくことによって、中国語に特有の様々な結果構文へと拡張されていく。本論文は、この拡張を構文文法という一般言語理論を通して記述することを目的とする。</p> <p>第1章と第2章で研究の目的と理論的な枠組みを説明し、第3章で結果構文を概観した後、第4章以降で各構文の意味と構造を豊富な用例をもとに詳細に分析している。</p> <p>第4章では目的語が状態変化を起こす場合を、第5章では主語が状態変化を起こす場合を、第6章では一見すると主語と目的語の位置が逆転しているように思われる構文を扱っている。さらに第7章では、同じ動詞が繰り返される特殊な構文を考察している。いずれの章においても、他の言語にも見られるような単純な構造から、徐々に条件を広げることによって、最終的には英語などでは全く考えられない構造へと拡張されていく現象が、自然に記述されている。</p> <p>審査会では、目的語による容認度の違いなど、これまで指摘されたことのない新しい言語事実の発掘が多数見られ、中国語学の観点からの価値が高いと認められた。同時に、先行研究では個別に記述されてきた構文群について、これまで以上に詳細かつ理論的に分析しただけではなく、構文拡張の観点から網羅的に関連付けられているほか、主題や焦点に関する情報構造など一般言語学的にも興味深い貢献がある点が非常に高く評価された。</p> <p>その一方で、客観的な根拠となる統語テストが不十分であるという指摘がなされた。ただし、最終試験において統語テストにより本論文の主張が補強されることが示され、今後の研究の発展が期待できると判断された。</p> <p>以上、本論文は執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。</p>			